# ヒューマン&モンスター

三条 蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒューマン＆ａｍｐ；モンスター

【Ｎコード】
Ｎ４２７０Ｚ

【作者名】
三条　蓮

【あらすじ】
楠原周は家族を殺され、独りになってしまった高校生。友人達と犯人を追うも見つからず、警察の捜査も難航。そんな時、周の前に吸血鬼を名乗る少女が現れ……？

最近、小説を勝手ながら大幅に変更させていただきました。

## 人ならざる少女

5月、夜9時。
一人の少女がビルの屋上に立っている。
青い髪に整った顔付き、抜群のプロポーションを持つその姿は、美少女と呼んでも申し分ない。
ただ一つだけ違うのは、その背中。
背中にはコウモリのような羽が生えている。
そう、少女は人間ではない。
「予言通りなら、この街に……」
そう呟いた少女は翼を広げ、夜の空へ飛び立った。
空高く舞い上がり、街を見下ろす。
そして少女は、何処かへ飛び去っていった。
ある人間を、探しに。

# 捜査会議

5月4日。
俺、楠原周（くすばる しゅう）は自宅のリビングにいた。
今、この家には俺以外には誰も居ない。
俺は四人家族だった。父さんと母さん、姉ちゃんが一人の四人家族だ。
ケータイに着信が入る。
ケータイを開き、画面を見ると、『海崎龍介（かいざき りゅうすけ）』の文字が。
俺は着信に出る。
「おう、周か？」
電話口から龍介の声がする。
「龍介か」
「おう、龍介だ。今暇か？」
「暇だけど」
「だったら家来いよ。今日もやるぞ、捜査会議。俊哉も友里もいるぜ」
捜査会議。
俺はその言葉に複雑な感情を抱いた。
「龍介……お前には感謝してる。だが、これは警察に任せることだ」
「分かってるけどよ……許せねぇんだよ。俺達も」
龍介は悔しそうに続ける。
「お前だって悔しいだろ？突然、家族全員失うなんて。俺達だってお前の親父さんやお母さんには小さい頃から世話になってた。だから、力になりたいんだよ。俺も、俊哉も、友里も」
龍介の言葉に俺は、
「……分かった、今からそっち行くわ」
そう返した。少し、詰まったような声で。

３ヶ月前の事だ。
この日、俺は朝から龍介達と遊んでいた。
夕方５時くらいに龍介達と別れ、俺は家路に着いた。２０分程で家に着き、家の扉を開けた。
そこで俺の目に飛び込んできたのは、
荒らされた家と、血だらけになった床だった。
俺は背中に冷たいものを感じながら、家の中に足を踏み入れた。
リビングに入った俺は、積み重なった人影を見た。それを見た俺は猛烈な吐き気に襲われた。
それは、血にまみれた母さんと姉ちゃんの遺体だった。その近くには、父さんの遺体も転がっていた。
その後の事はよく覚えていない。救急車と警察を呼び、遺体にすがり付いていたと思うのだが……
覚えていない。出来れば思い出したくない。

捜査会議はいつも龍介の家で行われる。というのも、捜査会議はもともと龍介の提案で始まったものだ。
俺は龍介の家に到着し、インターホンを押す。しばらくして、
「やっと来たか、周」
龍介が出迎えてきた。
「まあ、入れよ。俊哉達も待ってるぜ」
俺は龍介に招かれ、家に上がった。
今は龍介の両親は仕事中らしく、不在のようだ。俺はリビングに通された。
リビングには二人の男女がいる。二人とも小学生時代からの親友だ。
男の方は深谷俊哉（ふかやとしや）。オカルト好きの奴で、雑学にも詳しい。小柄で、強くはないが良い奴だ。
女の方は粕屋友里（かすやゆり）。とにかく頭が良い。昔から頭が良いのだ。ただ、高校では問題児扱いされている、いわゆるヤンキーだ。髪には

赤いメッシュが入っており、気も強く、ケンカも強い。
「あっ、楠原君」
先に気づいたのは俊哉だった。続けて友里も振り向く。
「あら、周君」　友里は口にポッキーをくわえている。
「さて、全員揃ったところで……捜査会議を始めますか」
龍介が仕切り、捜査会議が始まった。

今現在分かっていることは、俺の家族は鋭利な刃物の様な物で斬られたことと、犯人は一人だという事。それ以外は分かっていない。
「周は何か分かったか？」
龍介の質問に、俺は首を振った。
「朝、牧本さんが来たんだ。その時に言ってたんだが、この事件は警察でも首を傾げる難事件らしい。迷宮入りも有り得るってさ」
牧本さんというのは、この事件の陣頭指揮を取るベテラン刑事だ。時々捜査状況を教えてくれる。だがあまり良い報告がない。それだけ捜査が難航してるのだ。
「警察でもお手上げかー。どうしよう？」
俊哉が言った。
「こういう時は、この中で一番頭が良い友里の意見を聞きますか」
龍介は友里に意見を求めた。しかし、友里は首を振る。
「ダメ、なんも思いつかない。ていうか頭が良いからってアイデアがポンポン出る訳じゃないし」
全員がため息を吐いた。
そもそも情報が少なすぎる。何故なら情報源はニュース番組だからだ。牧本さんは守秘義務だと言って詳しい情報を教えてくれないしな。
やがて龍介は諦めたような表情で立ち上がった。
「仕方ない、今日は解散だ」
やっぱりな。
最近の捜査会議はいつもこの調子だ。

「悪かったな、周。今日も結局進展無しだ」
龍介がばつが悪そうに言う。
「ああ、別に大丈夫だ」
俺は適当に返し、家に帰る支度をした。

帰る途中、俺はコンビニに立ち寄った。
捜査会議の時、友里が食べてたポッキーが美味しかったから、同じものが無いか見に来たのだ。
スナック売り場にそれは売っていた。この地域限定販売の『みそかつ味』のポッキーだ。
俺はそれを一箱レジへ持っていき、会計を済ませた。そして店を出た瞬間、
いきなり腕をグイッと引っ張られた。
俺はよろけながらも、引っ張られた方向を見る。
そこには、一人の少女が立っていた。 青い髪に、青い瞳。身長は１６５センチくらいで、胸も大きい。まるで女子中高生向けファッション誌のモデルのような少女。
美少女とはこういう子の事を指すんだろうな、そう思わせるのに十分なプロポーションだ。
「ちょっ……何すんだよ！」
俺はその少女に向かって叫ぶ。
すると少女に腕を掴まれ、コンビニの外に引きずり出される。
歩道のところまで引きずられ、やっと解放された。
「貴方の家、何処？」
いきなり訳分からん。何だ、初対面の奴コンビニから引きずり出して、最初の言葉が『家、何処？』。
「何だよ、お前」
俺が言い返すと、少女は迫ってくる。
「いいから。家、何処？」
俺の話はガン無視か。

「人の話を聞け。誰なんだよお前」
「家の場所まで案内してくれたら教えてあげる」
少女は腕にしがみついてきた。
何なんだコイツ。よく分からん奴だ。
俺は変な少女の腕を強引に振り払い、その場から走り去った。少女は転んだ。腰を強打したらしく、その場で痛みに悶えていた。

俺の家まであと少しの所で、俺は見たくないものを見てしまった。
あの少女が立っていたのだ。
少女は俺に気づくと、駆け寄ってきた。
「お前……何でいるんだよ」
「付いてきたのよ」
どうやって付いてきたんだよ。
「……もういいよ。俺の家の場所教えてやる」
俺は観念した。
家の場所だけ教えてさっさと帰ってもらおう。

変な少女は俺の家に着くなり今度は、
「入っていい？」
とかほざきやがった。
色々口答えすると面倒なので入れてやった。ホントは入れたくないけどな。
少女をリビングに通してやった。あちこちをキョロキョロ眺めている。
「そういえば君って一人暮らしなの？家族は？」
「……家族は殺人事件で殺された。今は俺一人しかいない」
しかし、少女は質問の答えなどお構い無し、といった感じで部屋中を歩き回ってる。てか、早く帰ってくれ。
「ここは？」
少女はリビングの奥にある引き戸を開けた。

引き戸の向こうは和室になっている。そこには殺された俺の家族の仏壇が3つある。
すると少女は、引き戸を開けたまま固まった。その目は驚愕に見開かれている。
「本当だった……お母様の予言通り……」
少女は意味不明なことを呟いた。
予言通り？
「……ねえ、この部屋に入ってもいい？」
少女の声が真剣そうなものに変わった。
俺はただならぬ気配を感じた。
少女は和室に入っていく。俺はそれに付いていく。
少女は仏壇の前で足を止めた。
その目は仏壇を見つめている。
「……貴方の家族は、殺人事件に巻き込まれて殺されたのよね？」
「あ、ああ」
「犯人は見つかってるの？」
「いや、見つかってない。捜査が難航してるらしいからな」
「でしょうね」
今の少女の言葉に違和感を覚えた。まるで、事件の詳細を知ってるような……。
「この殺人事件……犯人は、人間じゃないわ」
「は！？」
何言ってんだコイツ。犯人は人間じゃない？
「ところで貴方、名前は？」
いきなり名前を聞かれた。
「……楠原周だ」
「私は白水沙姫（しろうずさき）」
それから一呼吸置いて、こう続けた。
「吸血鬼……ヴァンパイアよ」

## 吸血鬼少女と疑惑の幼馴染み

からかってるのかコイツは。
俺の家族を殺した犯人は人間じゃないとか、私はヴァンパイアとか、ふざけてんのか。
「お前……人をからかうのはやめた方がいいぞ」
俺は小さな怒りを抱いた。しかし、沙姫はそれを全く気にしていない。それどころか、
「だったら、証明してあげる」
とか言いやがった。
そこまで言うなら見せてもらおうじゃねえか。
「じゃあやってみろよ」
苛立ちからか、俺は言葉遣いが荒くなる。
沙姫はリビングに移る。そして俺に向き直る。
ん？
沙姫の様子がおかしい。
ポケットに手を突っ込んで何かを探しているようだが、見つからないようだ。
まあ、「これがないから証明できない」とか言うんだろうな。
やがて沙姫は探し物を諦めたのか、ポケットを探るのをやめた。
で、
「完全じゃないけどまあいいわ」
とか言いながら、テーブルの上に立った。てかテーブルの上に立つな。
と、その時、
沙姫の青い瞳が、一瞬で赤く変わった。血のような、赤に。
さらに犬歯がみるみるうちに鋭くなっていく。
そして背中から黒い、巨大な翼が現れ、広がっていく。辺りに禍々しい雰囲気が広がっていく。

やがて翼は完全に広がり、その全容を現した。翼幅は８メートルはあるだろう。面積はおそらく、コンビニの自動ドアくらいはあるだろう。
その姿はまさに、この世に降り立った悪魔。
その姿を見た俺は今まで感じたことの無い恐怖を感じた。
俺の家に、俺の目の前に、バケモノがいる。
蛇に睨まれた蛙。
今の俺を一言で言い表すなら、これ以上適した言葉は無い。
沙姫はテーブルを降り、和室に戻ってくる。
俺の目の前まで歩み寄り、赤い瞳で見つめ、次いで耳元に口を近づける。
「ふふっ、びっくりした？」
まるでいたずらっ子のような沙姫の言葉に、俺は腰が抜け、その場にへたりこんでしまった。一瞬で全エネルギーを使い果たしたような脱力感に襲われる。
沙姫の瞳の色は少しずつ青色に戻っていき、翼は最初から生えていなかったかのように消えた。
「これで信じてもらえたかな？」
沙姫に返事をする気力もない。
あんなもん見せられたら信じたくなくても信じるしかねえだろ。
少なくともあれは現実だ。夢でした、なんてオチは無いだろう。
とりあえず沙姫には適当に頷いておいた。
沙姫は俺の返事に満足した様だ。
「安心してね。少なくとも君に危害を加えるつもりは無いわ」
沙姫は俺に笑いかけた。
とりあえず、沙姫は俺に対して敵意は無いようだ。
だが、家族を殺した奴の事は聞いておかなくてはならない。捜査が難航している今の状況では、少しでも多くの情報が欲しいのだ。
「沙姫、俺の家族を殺した奴の事、何か知ってるのか？」
しかし、沙姫は首を振った。

「ううん、分かるのは犯人が人間じゃない事だけ」
「じゃあ、何で人間じゃないって分かるんだ？」
「『気』よ」
「気？」
よく分からない単語が出てきたな。
「『気』っていうのは、私達魔族が放つ物よ。それぞれ種族毎に違っていて、『気』を辿ることで種族を割り出すことが出来るのよ。周の体にはそれが残っていたの」
「それなら、『気』を辿って……」
「そこが引っ掛かるのよ」
沙姫は怪訝そうに言う。
「普通なら『気』は数日ほどで消えるのよ。でも、周は三ヶ月前に家族を殺された。それなのに、まだ『気』が残っている」
「じゃあ、犯人は近くに……」
「それは無いわ」
沙姫はきっぱりと否定する。
「もしそうなら、『気』は種族を特定出来るくらい残っている。でも周から感じ取った『気』は、種族を特定できないくらい弱かった」
「種族までは分からないのか」
沙姫は頷いた。そして、こう続けた。
「でも、魔族と付き合いのある人間にはその魔族の『気』が着くことがあるの。つまり……周の近くに、家族を殺した奴と関わりがある人間がいるってこと」
俺は驚愕した。
「嘘だろ……？」
「きっとそうよ。だから、この事はあまり言いふらさない方が良い」
ということは……、
俊哉にも、友里にも、龍介にも、言えない。
敵がこの中にいるかも知れないという、漠然とした不安が俺の心を覆った。

その夜。
俺は二つの事で精神的に参っていた。
一つは勿論、事件の事。もう一つは……
沙姫だ。
あの後、「事件の事を教えてあげたから泊めて」とか言うし、断ったら今度は「吸血鬼は人間くらい簡単に殺せるんだよ……？」とか言って脅してきた。
そして今は……。
「キャハハハハハ！！」
テレビのお笑い番組を見てバカ笑いしている。
テレビでは今、『往年のコント番組が一夜限りの復活』というコンセプトで、そのコント番組の傑作選を放送している。
「スッ、スイカの早食いがっ、キャハハハッ！！」
沙姫は今放送されているスイカの早食いを見て爆笑している。
しかも日が出ている時より元気そうだ。やっぱり吸血鬼は夜行性なんだな。
夜行性じゃない俺は寝たい。だが寝ようとすると、
「周、まだ寝なくていいじゃん。あと三日は休みなんでしょ～？」
と言って、俺の睡眠を阻止してくる。無理矢理寝室に行こうとすると、脅してくる。寝かせてくれよ。
確かに今日は金曜日で、土日二日と月曜日の振替休日は学校は休みだ。だが、俺は夜１１時までには寝るように両親から叩き込まれ、今もそれを実践している。ちなみに今は夜１０時半だ。
生活リズムを崩されたくない俺は、目の前でバカ笑いしている吸血鬼を睨む。
すると、沙姫が立ち上がり、俺の首根っこを掴んできた。
俺の足が床から離れる。
沙姫の顔つきはさっきと違い、かなり怒っているようだ。
「睨んだわね？」

有無を言わせぬ、怒りを孕んだ沙姫の声が、俺を凍り付かせる。
「吸血鬼はプライドが高いの。人間なんかに睨まれるのは、プライドを踏みにじられている感じがして嫌なの」
さっきとは逆に、俺が吸血鬼に睨まれている。しかも凄い威圧感だ。
「だから二度と睨まないで」
俺はコクコクと頷くしか出来なかった。
俺が沙姫に太刀打ちできない事が今分かった。やっぱり吸血鬼なんだなコイツは。
「あ……」
沙姫がテレビを見て、落胆したような声を出した。
見ると、今のコントが終わってしまい、コマーシャルが流れている。
沙姫は俺に振り向くと、ガスッ！！と俺の足を蹴ってきた。しかも二回。
「今のはコントが見れなかった分と、コンビニで転ばされた分だから」
まだ根に持ってたのかよ、転ばされた事。
しかし、沙姫は俺を蹴っただけではなく、
「バカ～～！！」
と叫びながら、家を飛び出しどっかに行ってしまった。よっぽど見たかったんだな、あのコント。
でもまあ、邪魔者がいなくなったからこれでやっと寝れる。俺は安堵しながら玄関のドアの鍵を閉め、二階の自室に入り、寝床に着いた。
……はずなのだが……。
ウトウトしてきた頃、窓を叩く音がしたので窓を見ると……
沙姫が窓を叩いていた。開けろってことらしい。
だが、やっと静寂が戻ったところなので無視することにした。

沙姫が窓を叩く音が次第に大きくなる。
（あーうるせー）
いい加減腹立ってきた。
ガシャーン！！
窓が割れる音がした。
俺はベッドから飛び起きた。
窓の前には沙姫が、その足元にはガラスの破片が散乱していた。
「テメェ……何してくれてんだ」
俺は沙姫を睨……もうとしたが、また吸血鬼パワーを発揮されたら面倒なので沙姫を見ずに言った。
「……今、睨もうとしたよね？」
ドキッとしたが、俺は平静を保つ。
「でも、ちゃんと抑えたみたいね。だから……」
沙姫の瞳が赤く変わった。
「ご褒美をあげる」
そして俺はベッドに押し倒された。
その上に沙姫が乗ってくる。
「おっ……おい、なにする気だ！？」
「言ったでしょ、ご褒美って……」
そう言った沙姫は俺の目の前で……、

服を脱ぎ出した！
「やめろ！そんなご褒美は要らねぇよ！」
俺は沙姫の手を押さえ、服を脱がせまいとするが、
「じゃあ無理にでもあげるわ！」
とか言い出した。
ご褒美って無理矢理あげるものだっけか？
その夜は沙姫を止め、部屋から追い出すことに精一杯で、結局眠れたのはかなり遅くだった。

目が覚めたのは午前九時過ぎだった。
下に降りると、既に朝食の準備がされていた。
キッチンではフリルがついたエプロン姿の沙姫が、皿を洗っていた。
テーブルにはオムレツとトーストが二枚、そしてコップに入った赤い液体。
パッと見ではトマトジュースのようだが、沙姫の料理なので血液の可能性もある。吸血鬼だしな。
「おはよ、周」
沙姫が振り向き、笑顔を向けてきた。
「これ、沙姫が作ったのか？」
「そ、オムレツにトースト、それからトマトジュースだよ」
どうやら赤い液体は血液ではなく、ただのトマトジュースのようだ。
俺はホッとして、沙姫が作った朝食を頂く。
率直に言うと、美味い。
トーストはトースターで作ったものだが、オムレツは美味い。生まれて初めて、ほっぺが落ちると言う言葉が実感できるような味だ。
「美味いな……」
ボソリと呟いた俺の言葉に、沙姫は満足気だ。

朝食を平らげ、俺は自分の皿を洗っていると、インターホンが鳴った。
俺は皿洗いを中断し、玄関に向かう。ドアを開けるとそこには見慣れた少女がいた。
「おはよう、周君」
その少女とは粕屋友里だった。
普段なら快く出迎えるはずだが、今日は状況が違う。家族を殺した奴と関わりがあるかもしれないのだ。
「ちょっと近くまで用事があったからね、ついでに来ちゃった」

友里はそう言った。
「そうそう、今日の朝に家の近くで事件があったらしくて、家に牧本さんが聴き込みに来たのよ」
事件？
「何があったんだ？」
「それが、誰かが刃物で斬られたんだとか」
それは……人事とは思えないな。俺の家族と同じ、刃物で襲われたんだから。被害者には同情するよ。
「で、話はそれだけか？」
「え、うん、まぁそれだけ」
結局友里は世間話をして帰っていった。
「周……」
声のした方に振り向くと、沙姫が真剣な顔をしている。
「間違いないわ、あの友里って子……」
そして沙姫は、俺が聞きたくなかった言葉を発した。
「昨日の周と同じ『気』が着いてたわ」
俺は愕然とした。
友里が、魔族の協力者？
まさか、でも沙姫の言葉に偽りは無さそうだ。
「本当なのか……？」
俺の言葉に沙姫は、小さく首を縦に振った。　信じられなかった。
俺の予感が的中してしまった。
「取り敢えず、友里って子には関わらない方が良いかもしれない」
沙姫から掛けられた、非情な言葉。
俺はその言葉に答えることが出来なかった。
もしかしたら、俊哉と龍介もそうじゃないかって思えてきた。
沙姫はそれを察したのか、
「それじゃあ、他の友人も調べましょうか」
沙姫は俺に俊哉と龍介を呼ぶよう促す。俺は俊哉と龍介に電話を掛けた。

２０分程で二人は家に来た。
俺は二人が来る前に「周は適当に立ち話をして。その間に『気』が着いているかどうか調べるわ」と沙姫に言われたので、二人と適当に話をする。
「なあ、周……お前下らない話をするために呼んだのか？」
龍介は呆れたように言った。俊哉もため息を吐く。
俺が話を続けようとすると、　二人は「帰っていいか？」と言うので、俺は引き留める。
すると俺の後ろから沙姫が現れた。
「周、二人は大丈夫よ」
俺は沙姫の言葉に胸を撫で下ろした。二人が潔白だと言うことが分かって良かった。
俊哉と龍介は目を丸くしている。
「周……その子は……？」
龍介は呆気に取られた様に言った。
沙姫が目で合図する。正体を明かしてもいいらしい。
絶対に信じてもらえないだろうが、取り敢えず沙姫の正体を明かす。
「コイツは白水沙姫。……吸血鬼だ」
「は？」
「何言ってんだ？」
二人からは予想通りの反応が返ってきた。そりゃそうか、俺も最初はそうだったし。
となると……アレを見せるしかないのか。
「沙姫、変身できるか？」
沙姫はオッケーと言わんばかりにリビングのテーブルに立った。
そっからは俺に見せたのと同じように変身していく。
沙姫が変身し終わったとき、龍介は腰を抜かしていた。
だが、その隣で俊哉は目を輝かせていた。
「うわぁぁぁ……」

オカルトマニアの俊哉は興奮した声を発した。
沙姫はそんな俊哉に少し戸惑っている。
「な……何このリアクション？」
沙姫は驚きを隠せない。
「凄い……吸血鬼って本当にいたんだ……」
俊哉が沙姫に少しずつ近付いていく。その姿は、小さい子供をたぶらかそうとする変質者に見えた。
「えっ、ちょ、ちょっと、キャー！！」
バシッ！という音が部屋に響く。
俊哉は沙姫にビンタされ、部屋の隅に吹っ飛ばされた。
沙姫の吸血鬼パワーをもろに食らった俊哉は、壁にもたれ掛けてへたばっていた。
「あービックリした！あんな人間初めて見た！」
沙姫は俊哉をビンタした手を、汚いものを払い落とすように手を払う。
「沙姫……お前、少しは手加減しろよ」
「だって、このままだったら今頃私は犯されてるかも知れないじゃない」
吸血鬼を犯す人間がどこにいるんだよ。

その後、俊哉が目を覚ましたので、俺は二人に沙姫の事、友里の事を説明した。
「……つまり、友里が周の家族を殺した奴と関わりがあるってことか……？」
龍介は驚いていた。
「可能性があるってだけで、確定したわけではないわ」
沙姫が補足した。
「でも、捜査会議はどうするの？犯人は人間じゃないってことだし、粕屋さんは……」
「それで、提案なんだけど」

沙姫が切り出した。
「その友里って子の代わりに私が参加するのは？」
なるほど、それはいい。
沙姫は他の魔族に詳しそうだし、申し分無いだろう。俊哉と龍介も賛成、と言いたげな表情を浮かべる。
「それじゃあ、決定ね」
こうして、俺の家族を殺した奴の捜索は、大きく前進した。
友里が共犯かもしれないという、不本意な出来事と共に。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4270z/

ヒューマン&モンスター

2012年1月6日12時26分発行